

## 情慾の哄笑

草刈娘の足本に 草がかけ茶碗を鳴らす所  
蛙が一匹、女の唾にひしやげちまつた  
開け開け、野原の一枚幕、其奴の情慾だ  
世界の情熱は彼女の唾に踏まれて喜ぶがいい  
あ、祭れ祭れ、讃むべきは彼女の唾……………  
草刈娘よ、凡そお前の情熱は  
ひつかけた唾の哄笑から晝顔にぼかんと口を開け  
生羞かしい處女は魅入られた現代の若娘になり上り  
乳割れの匂ひを満月の夜に祭るであらう。

## 静かな幸福

俺の體が此んなに炎に上り華く一切を呪ふたのは  
あの幼時、森に毒紅茸を盗んだからなんだ。  
吐ひた、死ぬまで吐ひた、あの昔の情熱、盗んだ心、  
だが見ろ、俺の體に響くのは歸つて來たあいつの聖だ  
聖だ、一生の聖だ、男の聖だ  
幸福よ  
あゝ、俺こそは一生此の脱くべからざる惱ましい心を抱いて  
あの森の魔精のやうに  
静かに木々の靈を數へ  
己れの自暴を赤い月の出に焚き上げてしまいたい

石蒜に身を盛る

秋空に向つて魂が悲しい失望の欠伸をする時  
竹藪に石蒜を俺自分の廻りにかりたくつた。

赤い頬々を俺の體に埋めた石蒜、

何時か巢食ろつた失望の心霊は赤々と眼覺めろ

女よ、俺の可愛い女なら

己れの化粧の壺を此處に彩色るがいい

あゝ、石蒜の靈氣は恐るべきぞ

俺は此うした心から

一心に赤く染め

竹の間の赤汁に身を切り盛り 白皿に捧げつくした。

南 瓜

しんかんとして蜻蛉が交尾やがつて行く所

己れの主張を埋屈無しに葉びこます南瓜の葉蔓

太陽がびりびり南瓜の花に憑かれてしまつたが

俺はたゞ平和な心に黄な大形な女を迎へる。

おゝ凸凹女優の樂屋、南瓜の花よ、俺は

俺は青空や野畑の貴族だ、

勝手にしろつて

俺れあお前を草茨の間に抱きしめたいのぢや。

## 晝 月

或ひは豪放せる序幕

お、お、動物のやうに尖つた俺の神経よ

あの蒼空の晝月、

あの月を見るものは俺の神経と

月の夜、魔物の魂を食らひちぎつた餓犬だけだ。

赤い花を求めたものは誰れだつて瞳を上げるな

晝月を視る者は此のやうな異反者だけだから

あ、蒼空は怖ろしいものだ、まして浮んだ晝月

あの晝月だよ、あの晝月だよ、

俺等の神経を休ますものは、

犬よ、飢れた犬よ、

昂暴な獨愁を一點の實景に追休さし

序幕にや素晴らしい木乃伊を立たすんだぞ。

## 狂人

どうとう朝鮮朝顔きらがひなすびに呪はれちまつたんだ  
あまりにも野草おそを恐れた故に神経を犯されちまつたんだ。  
そつとして口にした烈しい瘧、あの日、  
お前は野原から呪はれたんだぞ  
お、蒼空あそぞらにカラカラと放心を歌ひ  
伏し眼勝ちに開いた朝鮮朝顔きらがひなすびから伸び上り  
狂人は、虚空に火星を待つ所の喜び  
手を差し上げ、血を吐きながら勝鬪あを奏げたんだ。

## 日中の智慧こころ

俺の心を此んなに昂ぶらしたのは  
あの畑に咲いてゐたぼんぼんだりあであつたか  
いやいや、其脇に食事を喰めてゐた彼娘けやつであつた  
あ、日向に唇は沈痛に食慾を満たし  
真紅まつかにぼんぼんだりあは光榮に吹かれ  
唇くちの當りは聖ひじりに犯され  
智慧は日向に昇天し

此の畑の日中に降婚した。  
あ、遂に此の心昂、此の心は彼けやつに憑かれ  
日中、妖麗な昂靈はだりあを抱きしめ

凡そ世界の智慧を計り數けたんだ。

満 月

此んな單調な、たゞ青<sup>あ</sup>白<sup>を</sup>い湖上を悲しむまい  
田舎の狐は勝手に化けて踊るがしいし  
狸だつて腹鼓<sup>つみ</sup>を打つがしい、勝手だ、  
そら小石をひらつて、じつと、水に投げろ  
見よ、あれだ、あれだ、かれを打て  
其の一本の手にあの星共を掻き別けよ  
君臨だ、聖なる白花だ、今夜<sup>けふ</sup>の哄笑だ  
あゝ、まだ見ぬ未開の扉を一ぱい開け切つた夜  
此うして俺は  
夕顔の中から満月に手を差出すのだ。

## 聖裸たる信仰

草一面の庭に夕顔が走り廻る夕暮

村娘は乳房を隠し

身を野風呂に沈めた。

解ぎ捨てた裾、一切の腰巻、視線を集めた祕密室

ぞつとして眼を呉れた俺の心霊よ

指と云ふ指、怖<sup>おび</sup>わて手も足も地面に食らひついた

白い花なら彼女に捧ぐべき 衣類は野天に祭るべき

あ、神々は女像を抱<sup>いだ</sup>いて喜べ

彼女の信仰、一切の願求だ、祝福だ

さあ、神々よ、

俺と共に酒樽を抜き破り

聖裸たる信仰に

盃を傾け打ち砕こう。

情熱を迎へる

柘榴がぼかんと口を開け切つた秋  
蟲けらまでがしんからしめじめと鳴きくさる。

秋よ、あの己れの赤い情熱を何處ひらに拾へばいゝか

柘榴でさへ火焰を吐き 一切を叫び

●●●●●  
まんだらげだつて食つちや つい現々うつくど、

秋原くさつばの狂王きやうわうとなり赤く指を伸ばすんだ。

狂人よ、せめても狂人きやうじんよ、

秋の孤獨を柘榴に祭り

己れの爲に、情熱しんくの太陽を胸に吊りさげて呉れ。

魔術師の眼

紅 頬

此んなに惱ましく此んなに月の朧まろい中

俺がの粗ざ荒あな指さだけががさがさ胸をかきくさる。

あの彼女あいつの頬故こに此こうも惱あましくかくも嘆なげき

俺自身の胸にかやつつを吹き込め吊り下げたんだ。

よしんば俺が春宵はるのよの リンリンたる貴公子でも

此の情顔うらたには嘆なげくべき世界は頰ほぶきぞ

あゝ 此度このたびこそ彼の頬紅ほべにを叩き落し食くひしぱり

スンスンとくりむかし穴を開け

あの旗上げの日を

ぎつくりと抱きしめてやるんだ。



紅唇

諸君！ 此れは一體どうした事か

俺の體さへ此うもふらふらと

わいっつに吸ひつかれ 胸一ぱい開けたのは

彼の芝居を知らぬ男性の心故に……………

諸君！ 男性なら頬を叩いて聞け！

昨夜、ごたん場の柳にひつかつた片割れ月に

甘娘の泣いて殺されたけやつに違ひあるまい。

あゝ悲しい話だが

もう一度開けつ放せ

解いで解いで觸つた靈感、其の處女。

月影

蹴飛ばした小石、閑と鳴りくさつた夜中

俺の體から重くぶら下つた幽靈よ。

こいつの靈なんだ、小石さへ知る靈なんだ、

溝鼠さへ怖わて小便を飲み込んだつて云ふんだから

月は企らみ陰計を流たんだ。

影よ、俺はじつとして青骨を編み

もう一度、ぶら下つた其いつに小石をぶつつけた、

すました耳、じつとした眼、眼も耳も刻んだ、

あの月陰の本體から 俺達の心と體の二つを別け

地獄天獄の陰と形の銘を空間に立ててしまつた。

老 僧

ぐるりの古風な孟宗簍に剛毛の白眉を閉ぢ

老僧は竹林の庵に指を折り歪げ

剝り引出し觸り感じた餘生の胸毛一本

あゝ、一生食らひ葉び込み癩れ老けた蟲けらめ！

貴様の其の信仰の發現の日

遂に今にも胸毛はぐるりの竹々を逆に生やし

極樂とも地獄とも

たゞもののしき信仰の秘願に

太陽はガランガランと地中に馳けづり廻すに違ひあるまい

囚 人

馬鹿にも想へ、何んで彼れが悪人であるか  
彼れの熱情は

深夜の法律によつて彼れを凱旋せしめたと思つていい……

あゝ、何んと云ふ事だろう此の青色い幻旗、鉄鎖は、

此の現代の陰謀はごうして

野や街や碧空の故郷を彼れに戀しくさすだろう。

法律は猫の爪より感じ易い、囚人よ。

投げ出された筆に現代の焦點を書いた時

白い聖壇の上ちや神様のお嘆きだ

然し囚人よ、其の革命や嘘の喇叭を吹き止めたら

意味ない世界に神様は  
實に意味ない欠伸をされやう

老 婆

ぶら下つた一本の何齒が抜けた秋  
女は一生を探検し終へた 解かぎ捨てた衣  
衣は彼かの彼岸花の間に一本氣な宗教に流してしまふ  
讚へ、讚へ、女の場合、酒場のカッブだ  
人生の網渡りがいくくら恐おそなくとも解決は此處ひこ  
花々しい記念碑は彼岸花の赤色にほひを塗れ  
諸君！ 次の華美な精神を待つ者は  
骸骨を編む絞首繩を彼れに與へるがいい。

## 四十女

あまりにも平凡な愛を恐れた故に、一寸手先を觸れて見た、あの屋根裏の猫だ。

青蛇にも似た烈しい淺間しい此れは又古風な情慾、讀へた男性は沼地の木の葉だが、然し次にはけろりとして一冊の本の間に投げ込み金満家の巢でも入りたがる、實に厄介な小徑の石塊である。

## 化粧品舗

赤や白に自然の衣裳を殺塗するの生命てあろうか  
恐ろしい孤獨の情慾の世界でもあるか

何しろ此んな癩な嫉ましい事はありやしない。

もう處女の肉體も花のやうに面貌を強め

朱ひ夜明けの結婚へ鎖を結ぐぢやないか

腐つた溝の兀鼠さへ昇天すると云ふ店舗だもの

此の第一頁の扉を開らかうとするんだよ。

あゝ、黄色な處女も野良犬のやうに舗の情感に吹かれ

夜明けの扉には

火焰のやうに赤く尻尾も二つの夢に吠わるであらう。

或る三面記事記者の手記

三面記事の真劔は切り捨ての大根と云へやう

色戀の沙汰だつて解決は裏長屋の井戸端會議

白色の婦人問題、地下五尺所の殺人事件

何んで此れが上品な貴族かかたに聞こわせやう

よし吾々の陰謀記事だつて明日あすは路傍の犬遊び

然し、吹け、此のしがれな喇叭

あの旗印の婦人共、

隋胎や自殺や密賣婦

其の莫迦げた社會を一束一と絡めまきめ

赤い青い發情の人間共に賣りつけて

さて、世渡り上手の運般車と行きませう。

## 氣違ひ雨の降る胸

馬鹿々々しい氣違ひ雨の降る眞晝、

日和だと云ふのに最早地面は濡れて

變にな、ばけは萬本の紅傘をさしよつた。

あゝ、季節の想ひも萬本の傘を張れ

天候なんかも此のやうに氣違ひ染みて

ひねくれ小便も垂れるじやないか。

聞け！ 七化けの小蔭に己れの胸を休せ

俺は遂に、遂に狂風を冠り 雲々の靈を數へ知つた。

## 現實の門口へ

太陽が眞黒けに死狂ちまつた眞晝間

肉屋の方から妄想が歌ひ出してしまつたのだ

彼れを枯らせ 彼れを祭り上げろ

見よ、昔死んだ戀人が黄色い素顔を出す

あゝ、俺をやれ 彼方へ

彼方にやつて呉れ、此の赤套だ、此奴だ、

たゞ已れを恐ろしい空間に挽き廻す爲には。

## 解 放

思ひ出しても恐しい事だ

あの鎮守の森の天狗の面が恐いので

月の光に泣いて、田圃の蛙さへ鳴きくさるんだ。

お、踏みつぶした蛙のどん腹……

一枚枯れた扉の破間、見るな、恐ろしい赤色の空よ

俺の出發は此處から投出されたのだ

お、あの悲しい緋薔薇を荒く捨てて呉れ

青空へ、青空へ、己れ無限の地獄まで。

## 廻感せる純情

口を切つた無花果の木蔭に

足形に汚れて女下駄が一つ頬笑んでゐた。

お、彼れ、あの姿、一眼見た彼れ男地獄だつか

あの男地獄、此の俺さへ變な感じが身を打つた

彼の靈情よ、此の胸を切つぱり抜かせ

あ、俺の身中は尖り鋭ひ豫感に、此處

俺が最初戀された少女が悲しみながら羞ぢらひながら

靜かに官能の一切を皿に盛りながら骨々を叩き廻つた。

## 眞晝の思想

聖母がそろ／＼欠伸をしなざる時刻

宗教なんかけし飛んちまつた晝寢の男共よ

丸い足が二本、眼の先に眞夏が絶叫するばかり

仰げば白い雲が　ぎこちな屋根間から覗るだけ

あゝ思ふても美かな野薔薇の中に

熱い帆を上げ、畑の中をかけ廻り

馬鹿な世の祭壇を、理解を、地べたに投げ捨て

變な信仰に

薔薇の葛にあの足を祭り上げたい。

## 山茶花

此れに己れの呪咀詞を祕禱ろうつて無理な事

此奴は沈痛で處女で陽陰を犯したんだ。

あゝ、俺の此のやうな魂には嘆くまい、女よ、

あの化粧娘の足裏をもう悲しむまい

俺は白紙一枚に花を乗し　日向に乾して眺め廻した

其夜、俺は咽せ返つた官能に處女を感じ

日向の匂ひを幸福に埋めて唇に走らした。



鄉  
土  
詩  
章

## 阿羅波比の雨

惱ましく悲しき此の薄闇、

夕暮、じみじみと降る雨に心はほ、け

まぬけた感覚にうつらうつらと波の音を聞く

あゝ、かの新しき紅なる月も見ず

松原の間に吊り下りほ、けた俺の心を見て呉れ

見て呉れ、此のいたいたましい雨にいたんだ吾が心……

じみじみとじみじみと、雨が、雨が、

何かの靈を持ち、泣きじやくりながら雨々が

天倫寺の鐘音を綴りながら泣きに下りる

じみじみと泣きに下りる、泣きに下りる。

新橋川

葦間に啼き轉ろぶ蛙の聲に

赤い月の出でも讚美まむと舟を浮べたら

人々よ、お前のぐるりはまつくろく鴉がおりくんだり

舟のまはりは蛇の鎌首でいつばいだらう

びろびろと、びろびろと、

うつかり葦間の蔭に草笛を奏げるな

友よ、此の異國めいた奇怪な川にお前は身を崩し

鴉の群れに身も心も食ひ散らされてしまうだらう

あゝ、見よ、うねくされた川の遙か

ふらづいてふらづいて 月がどんよりとのぼり上つた。

和田見川

朝、

日の光り、光り、光り、

寝ぼけた皺面の厚き白粕をゆがめ

のろのろと行く、

水を流して、

けはひのあはれ、あはれ流るる、

朝、

日の光り、光り、光り………

普門院

此の怪しげな心は、此のすり上つた心は  
此のゆがみいぢけた心は

遂に、遂に妖鬼に犯されちまつたんだ。

あの古び腐れた松のてつべんの

ひよろひよるとたかづらの花咲けるなんと

なんと吾が心を病みつかせる事か

此の犯された心よ、病みつきいたみたる心よ、

深夜、じつとじつと耳をすまして

狸小僧の小豆洗ひの音を聞け！

あゝ、聞かなんと人々よ、

君等がもしも此處等を怖れ、

「東北」でも謠つて歩ひて見ろ

お前はすぐと狂るほひながら眼を抜かれ

緋の袴の魔女に怖れながら

抜首の笑ひに身を投げるに違ひあるまいぞ。

註。かつて悟堂中西の住せるところにして多奇あり怪におびゆると

ころなり。今はさほどもなきも、謠曲「東北」を謠ひなば、今

とて怪しきもの現れ、不思議なることたび／＼あるなり。さる

ほごに此の處にては其の　をなにびども　はぬなり。

## 避病院

眼にしみて

白やかつと照る白壁の恐怖よ

おもへばうら悲しい傳染病をどうして

どうして呪ひ憎み恐るゝぞ

いくたりか黒き棺の行き来りて

白き粉なごまき散らし行く人夫を

鬼のごと恐れし吾が思出よ、

哀れにもおそれおのゝいた妄想のいまいましきは

血にまみれた頭、眼、唇、掌いちめん犯され

病の類がふらふらと子子のごとく

よろけながら其處等を泳ぎ廻るのだ、

川邊にほどほど葦群れ茂り

青鋭き劔に注射せんと吾が體に向くぞ

あゝ、俺にもかの魚のごと

いつさんに、いつさんに、息をころしてひたばしろう。

註。吾れ幼なき頃、コレラ流行なし、巷に黒き棺の行くを見る。其

の後につきまどへる消毒人夫をまもの如くおそれ、吾れ等小

兒をもかのごと棺におしこむと思ひしなり。

其時よりして傳染病患者を擁ひせる避病院を恐れ、其の前路を

通行せんとする時は必ず息をころしてひたばしれり。

此の思出の詩は此章にいれざるものなるも、また郷土詩と共に

愛唱せむとするにより此章に葉入せり。

詩集の終りに

## 詩集の終りに

余は此處に詩稿十數冊の中から自ら選抜なし詩篇百二十九篇を以て一卷となし「噴水の掌」と名づけて市に出す事にした。此れ等はほとんど未發表のものが多く、余としてもまた新なる感じを諸氏に與うる事の出来るのを喜んでゐる。

本集「噴水の掌」と云へる集題は詩篇中表題を採つて表記したのみで何ら別に深い意味はないが余の表題が余の苦悶と病患の感じを出しゐる爲とそしてよく余の詩風を此の題名が表象して呉ると思からによるものである。

序文に書ける如く余は此の詩集を以つて今の混亂たる日本詩壇に送りまた此の詩集を苦悶詩集或ひは鬱悶の疾患詩集と名づけたいのだ。しかしてまた此の詩集がよりよく理解され、よりよく價值をみとめられ、よき友達と合ふ事を願つてゐる。そして又此の詩集に嚴正なる批評を下されむ事をおねがひする。いかに打たれてもいかに叩かれても正しき批評に合ふ事はうれしい。其れが余を、否！凡ての詩人より圓熟の彼方に進まずものであるから。

此の詩集に集めた詩篇は此處三四年來のものを取つて成したものと

で、其れ以前の詩は詩風の關係と詩集の感情上に於て又別の集にまとめる事にして割愛する事にした。然し其れ等の作品と云へどもまた余の作品である故可成古いものではあるが其内二三篇をせめても  
の記念として卷中に葉入成した、故に卷中に於ていくばくか詩風の異へるものに合はゞそれであると思はれたい。

集中に於て讀者は先ず此れ等の詩を二つに大別する事が出来るであらう。其れは常に吾が胸に持つ呪咀や悲想が表面に現らはれてゐるものと、其れ等がまた内面的になつてゐるものとある事である。即ち「月夜の顔」「魔術師の眼」「農夫と漁夫」「曼珠沙華」の四章が前者であり「地獄」「羞かしい肌膚」「噴水の掌」「怖ろしきけもの」「郷土詩章」然し「郷土詩章」のみは詩集の關係を思ひて



章が後者である。

後者は可成最近の作品で余の胸の苦悶、呪詛、悲嘆、疾患に苛噴を受けた苦しい余の叫びあり、内面的に詩筆を成した（むしろそう成り其れ等の苦しみがそうせしめたのであるが）ものである。前者は其れ以前の作品で吾が苦しみや呪嘆に責められて思ひ切り叫んだ（反抗したと云へるがまことであるか）時代の作品である。前者も後者も其の章中に交作してゐる作品が多少ある事はまぬがれない。また前者より後者に入る過度的なもののある事もまた勿論である。

組方は後者即ち新しいものより組み古いものを終りに組むにつとめた。

一番最後に組んだ。「郷土詩章」は先に出版した松江詩話會年刊詩集第一輯「青柳の湖」に「郷土風物詩」となして此等と別なものを十篇程一束しておさめておいた其れ等作品以後のものであると思つて讀んでいたゞけばよい。勿論吾が郷土の風物である故もつと多く出来るべきものなれども其れ以來の期間が短いためたゞ此處に數篇掲ぐるの如何んともなしがたき理由となつた。人は余の詩風にして風物をうたふをある疑ひを持ち別種な感じを以て嗤ふかもしれないが其れはあまりにも愚なる極みである。如何なる詩風を持つものと云へども郷土の風物や感情は胸深くくひ入つてゐるものなれば其れをうたうは當然なる理由である。されば此處に何ら恥じず公然と此の集に葉入成した譯である。

余のみでなく誰れとても一番初めの本の出るのは嬉しい事にちが

ひない。余は此の喜びにより刺激され、詩作を勵み此の詩風をより進轉せしめるごちかふものだ。

此の詩集が世に如何なる影響をおよぼすか勿論余の知るところでないが、凡そ此の詩集によつてある暗示を詩壇は受くるであろう。然し此の詩集が獨異なるものであればある程、其の「如何なる眼で見られるか?」「如何なるあつかひをされるか?」と云ふ事は疑問であり、余の一切の謎である。

終りに此の第一詩集を世に送る事を、此の喜びを得さして呉れた畏友岡明晴氏に末筆ながら厚く厚く感謝の意を表する。

詩集整理後 著者

噴水の掌	
著者	松江市東茶町 坂本 精市
發行者	松江市東茶町 坂本 誠一郎
發行所	松江市東茶町二十七番 松江詩話會
印刷所	鳥取縣境港京町 岡印刷所
印刷者	岡明晴

大正十五年八月十五日印刷  
大正十五年八月二十日發行  
(定價壹圓六拾錢)  
送料拾貳錢

目々書會話詩江松

第一刊

青柳の湖

松江詩話會編

定價壹圓貳拾錢  
送料六錢

第二刊

紫陽花の町

松江詩話會編

近刊

詩集

噴水の掌

坂本精市著

定價壹圓六拾錢  
送料拾八錢

詩集

虚空盃

栗間久著

定價壹圓貳拾錢  
送料六錢

松江詩話會  
パンフレット  
第一篇

黒船

坂本精市著

近刊

評論集

日本詩壇と批評家

坂本精市著

近刊

詩誌

松江詩人

松江詩話會

定價貳拾錢  
送料貳錢



終